

# 県小中学教研会報

発行 石川県小中学校教育研究会  
金沢市尾山町10番5号  
石川県文教会館内  
電話(076)262-4916

編集 石川県小中学校教育研究会  
広報部

印刷 株式会社 山 越



第2回石川県小中学校教育研究会研究大会（石川県地場産業振興センター本館）

## 自主研究をすすめ、さらなる学教研の発展を



石川県小中学校教育研究会

会長 三益象二郎

大型の台風十一号の接近で、開催が危ぶまれた石川県小中学校教育研究会第二回研究大会も、石川県教育委員会教育長 木下 公彦様、石川県市町教育長会会長 野口 弘様をはじめ、多数の御来賓の皆様方に御列席いただき、また多くの会員の皆様に集まっていたいただき、八月十一日に無事終えることができました。

本県における小中学校の教育の質の向上をはかり、児童生徒に確かな学力を育むため、また全県的な教育研究の場の必要性から、「石川県小中学校教育研究会」が設立されて二年がたちました。

今年も昨年が続いて「石川の授業研究文化の継承と発展」のテーマのもと、会員の参加型の会、交流し合い、高め合える研修の機会をめざして、大会の運営について議論を重ねてきました。

開会式に先立ち、午前中の各郡市町学校教育研究会ではそれぞれ地域の研究報告や論点に基づいた意見交換会が行われました。今年「学力向上」「小中一貫教育」という論点を決めたいへん活発な意見が交わされました。

開会式後には、「いしかわ学びの指針十二か条」に示されている「物事を多様な観点から考察する力の育成に向け、多面的・多角的に思考させる」に通じる批判的思考力（クリティカルシンキング）の第一人者である道田泰司氏（琉球大学教授）をお招きし講演して頂きました。

講演会の後、参加型の研究会

として昨年度募集した「教育実践研究（奨励研究）」八本の実践発表がありました。「学力向上」や教育全般における意欲的な研究を推進することを目的として、教科団体や先生方ご自身が日々研究している実践の報告がありました。自分の教科や領域にとらわれず、他教科や他の領域の実践に触れ交流していくことも、この会が設立された当初の目的の一つでもあります。

本会が、研究大会だけに終わらず、年間を通じた研修活動の良い機会と捉え、「石川の教育振興基本計画」や「いしかわ学びの指針十二か条」が具現化された実践や活動の交流や推進の場になることを願っています。

また、「教育実践研究」の募集と共に、この六月末に石川県教育委員会石川師範塾「自主研究会支援事業」の募集も実施されており、教職員グループ自らが指導力や人間力向上を目的として、自主的に研究を行うことへの支援も始められております。是非、これらを活用してこれからは子どもたちの未来のために、全教職員で教師力の向上に努めていきたいと思っております。

まだまだ周知されていない部分が多く、課題も多い本会ですが、会員の皆さんの積極的な研究活動への参加を期待するとともに、石川県教育委員会、石川県市町教育長会をはじめ石川県小中学校長会や石川県小中学校教頭会など、関係諸機関の皆様方の引き続きの御支援をお願いし、本県の教育活動の中核を担っていききたいと思っております。

### 祝辞

石川県教育委員会  
教育長 木下 公司

本日、石川県小中学校教育研究会第二回研究大会が盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

本日、お集まりの皆様には日頃より本県の学校教育の充実や児童生徒の健やかな成長に向けた取組への御協力、並びにその積極的な推進に御尽力頂き感謝申し上げます。

さて、本県では「未来を拓く心豊かな人づくり」という基本理念のもと、ふるさとに誇りを持ち、確かな学力、豊かな心、健康や体力のバランスのとれた人づくりをめざし、子どもたちがこれからの社会をよりよく生きる力を身につけさせるために学校の教育力、教員の指導力の向上を進めております。

この中でも確かな学力につい



ては、学校教育法に学力の三要素として基礎的な知識及び技能、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力、表現力、その他の能力、主体的に学習に取り組む態度があげられておりますが、加えて変革のスピードも著しい現代社会を生きる子どもたちが社会を生き抜く力を身に付け、未来への飛躍を実現するために「答えのない」

または「複数の答えを持つ課題」を見つけて、最善の解決に導くことができる能力、いわゆる課題発見力、課題探究能力が必要だと捉えております。そこで、「いしかわ学びの指針十二か条推進事業」を中心にすべての小中学校において基礎・基本の確実な定着や活用力の向上に取り組みとともに、課題発見力、課題探究能力の習得をめざす「課題発見力育成事業」にも取り組んでいるところでは、

こうした中、学校研究だけでなく、各郡市町教育研究会や各教科等研究団体など、四十をこえる団体がネットワークをつなぎ、授業研究を活性化し、本県小中学校教育の一層の充実と児童・生徒の学力の向上に資するという本研究会の主旨は大変今日的であり、意義深いものであり、県、市、町、

学校が一体となって教育実践に取り組み中、その中心的役割を担い、実効性のある活動に取り組まれていて、県としても大いに期待をしているところであり、

今回第二回の研究大会を開催

するとということ、県全体のレベルアップに向け、活発な研究協議をお願い致します。

最後になりましたが、本研究大会の開催にあたり、御尽力頂きました関係の皆様に対し、深く感謝を申し上げますとともに、本大会の成果が小中学校教育の更なる充実、発展に生かされまことを心より御期待申し上げます。お祝いの言葉と致します。

### 祝辞

石川県小中学校教育長  
会長 野口 弘

今日は第二回目の石川県小中学校教育研究会の研究大会が盛大に開催されましたことを心からお祝い申し上げます。この研究会の設立に携わったものの一人として、本日にうれしく思います。おめでとうございます。

本研究会は、県内の教職に携わる先生方の様々な要望に応えるために、三年前に各地域、市、町にあった研究大会や研究会を一本化して誕生したものと思っております。このことが全県的な視野に立って研究を進めることを可能にしたものと思っております。

大会テーマが「石川の授業研究文化の継承と発展」であります。これは、私たちがこれまで大切に育ててきた「指導力や指導技術」といった教師にとっての財産をいかにしてこれから次の世代へ継承していき、またさ

らによりよく発展させていくか、その思いが込められていると思っております。

ベテランの教師が大量に退職する一方で、新規採用の若い教職員が増えていくという状況は今後も続いていくと思っております。

そんな状況の中で、私たちに課せられた責務は、子どもたちのためによい授業をしていくため、どうすればよいのか、子どもたちに対してどのような力をつけさせなければならぬのか、また、いかにして責任ある教育の実践を進めていくべきかということであろうと思っております。

それにはまず、自らをより一層高めたいと考えることが一番大事であると考えています。自己を高めるためには、各個人が一人でやる研修もあります。また同じ目的を有する仲間達が集まって行う研修もあります。この研究会では、大きな仲間の輪の中で研修を積み重ねていくことができますと考えています。

個の成長が集団により影響を及ぼし、集団の成長へとつながっていく。また集団の成長が個の成長を促していく、そうした循環が教師集団の成長となって石川県全体に波及していくということを願っております。

皆様方の研究会が年輪を刻むが如く、今後も着実に成長されることを御期待申し上げます。祝辞と致します。本日は、誠にありがとうございます。

### 郡市町教育研究会協議会報告

能美市立浜小学校  
新川 淑恵

県内十六の郡市町教育研究会から、今年度は四郡市の教育研究会の報告がなされた。

①輪島市…会員数は減少方向にあるが、各部会の取組に授業研究が明確に位置づけられ、授業の振り返りや授業改善の方策を得る場になっている。また講演会やフィールドワークなどでは、講師から聴く具体的な活動や実践例が、今後の指導の参考になっていること、「奥能登スタンダード」を踏まえた授業研究が成果をあげていること等が報告された。

②羽咋市…研究主題を定め、授業力及び指導力の向上をめざした各部会の取組が教育効果をより高めていること、また各校及び団体の研究物を審査する「研究物審査ワーキング部会」の開催が授業力向上のための具体的な手立てとなっており、さらに研究に対する会員の認識を深めていることが報告された。今年度は会則を一部改正して設置した、



研究物審査検討委員会が「研究物審査ワーキング部会」の位置づけを明確にしたとの報告もなされた。

③河北郡市・年度末に小中学校教科等別研究集録、中学校教科等研究集録、事業部会報告書、学年研究集録の四種類を作成し、種々の活動の見える化が成果を上げていること、会全体として、今後は県の受け皿としての各部会の運営や次世代への継承を確実にを行うこととの報告がなされた。

④能美市・市教育委員会との連携した授業改善の取組やデジタル教科書指導案集や小中の連携による外国語活動指導案集の編集等が効果を上げているとの報告がなされた。今後は市全体の教育の成果や課題をさらに検証し、次年度へ確実につながる研究推進体制確立の大切さが報告された。

グループ別の情報交換から

・小中連携の授業研究が学力向上につながる。  
・小中学校が同じ単元内容で部会研究を連携していくことが大切である。  
・人材育成は学力向上及び組織力の向上の取組と表裏一体をなすものである。どんな学校を創るか等の一翼を担わせることが主任層を育てることであり、さらにその主任層らといたかに若手を関わりあわせるかが重要である等、学力向上と人材育成の視点で話し合いが行われた。  
昨年同様、どの郡市町も授業

研究は熱心に行われている。中でも若手の育成や各関係機関との連携を意識した取組が見られる。今後は郡市町の取組から相

記念講演

「豊かな学びを育むクリティカルシンキング」

— 答えのない課題に対する学び —

琉球大学教授 道田 泰司



事前にお願ひした問いに答える形で、ご講義頂いた。

○クリティカルシンキング(以下CT)の有用性・必要性

近年、CTはシブズンシップ教育に必要なスキルとして、持続可能な開発のための教育(ESD)で育みたい力として、など、いろいろなどところで見られるようになった。また、二十一世紀型十のスキルにも含まれている思考方法の一つでもある。変化が激しく、五年後十年後

が予測不能なほど先行き不透明なこの時代には、過去の正解や常識的な回答は、必ずしも役に立たないことが多い。そこで、いろいろな物事をクリティカルに理解し、判断し、実行する力としてCTが必要とされている。○CTとは何か

CTは、一般的には「批判的・懐疑的」のイメージが強いが、さらに「合理的・論理的」「反省的・省察的」を加えた三点を頂点とする批判的思考の大三角のどこかに位置するものであると考えると分かりやすい。一九一〇年代のデューイから始まり、様々な研究がされてき

互に学び合い、学校運営の全てにつながる人材育成の視点で「石川の授業研究文化」を深化させていく必要があると感じた。

たが、合理的(論理的にきちんと考える)反省的(意志決定や問題解決に対してじっくり考える)思考と定義できるだろう。そして、その合理性・反省性のどちらを重視するかは人や状況によって異なるのである。「いしかわ学びの指針十二条」の一条目「根拠や筋道を明確にさせる」は合理性を、二条目「物事を多様な観点から考察する力の育成に向け、多面的・多角的に思考させる」は反省性を求めているものである。また、「常識にとらわれずに他の可能性も考えてみる」というCTの視点を取り入れることで、「相手を意識して話す」「よりよい学習習慣」「家族とのコミュニケーション」「研究の活性化」など他の条目も「よりよさ」を追求することができる。

○CT教育を考える枠組み・教科学習におけるCT  
合理性を高めるなら「ルール・ツールアプローチ」、反省性を高めるなら「場づくり・プッシュアップアプローチ」が考えられる。ルールを提示し、それを手掛かりに考えさせたり、ベン図や

ト型カードなどのツールを埋めながら考えさせたりすることで、偏りのない、筋道の通った合理的な思考の実現が可能である。一方、デイベートのように強制的に質問や反論をさせたり、道徳のジレンマ授業のように討論・ブレインストーミング・振り返りなどの場を作り、他の考えに触れ自分の体験を見直したりさせることで、即断せず、判断を保留して反省的に考えることが可能である。

学校現場では、このプッシュアップアプローチに正対するブルアプローチがよく見られる。「解きたくなる教材・話したくなる発問」などを提示する方法だが、このアプローチにばかり頼ると、「題材に興味をもってないと思考できない学習」に陥りやすい。そこで授業では、ルールやツールで思考をサポートしながら、じっくり考えるための場づくりやプッシュで思考を深める働きかけが必要である。その際、型を提示すると質問を作りやすいが、形式的になってしまい、真の内容理解に達していない場合



があるので、注意しなければならぬ。○「正解のない課題」を解決するためのCT

CTの力を育てるには、権威主義的知識観から構成主義的知識観への移行が必要である。前者は、正解を持っている、或いは正解かどうかを決められるのは権威者つまりは教師や教科書であり、正解は常に正しいという知識観である。対して後者は、知識は自分たちで作る出すことができ、正解は時代や状況・文化によって変わらうという知識観である。この構成主義的知識観を養うことで、自分たちで探究し、考え、知識や正解を作ろうという「課題探究型教育」を行うことができる。

このような正解のない課題に立ち向かうには、以下のような鍛えが必要である。総合的な学習だけでなく、各教科領域や日常生活でも「正解のない課題」を追求する経験を多く持つこと、「教科書にあるから正解」「教師が認めることが正解」のではなく、「正解を決められるのは自分たち」という感覚を持たせること、そして「簡単に決めてはダメ」「納得いかない」という声が大切にされる学級文化が必要なのである。

こうして自分で見つけ、考え、納得した学びは、目先の正解を暗記してすぐ忘れるようなことはなく、生涯にわたって生きて働く知恵の基盤となるだろう。つまりは、CT教育は、豊かな学びを育むのである。

教科等別研究協議会報告

第一分科会

国語（石川国語の会）

「子どもとつくる国語科の授業」を研究主題として、①「単元を貫く言語活動の工夫」、②「国語科授業力の向上」の二つの視点を大切に「たぬきの糸車」の実践例が発表された。一人一人が大切にされ、子どもたちが主体的に参加している「合い」のある学習、変容のある学習のあり方について発表がなされた。



読書指導（白山市学校教育研究会 学校図書部会）

「学ぶ力を育てる読書指導」をめざして確かな学力を育むために図書館を活用する国語科や調べ学習における授業のあり方の研究実践が発表された。①言語活動の単元構成や発展教材の提示、②二通りの並行読書の提示と不読者減少への取り組み、③調べるスキルを他教科でも活用すること等の重要性が、具体的な実践を通して発表された。

図画工作（金沢市小学校教育研究会 図工部会）

「指導要領の趣旨を生かした図工科の実践方法について」を研究主題として、授業研究及び美術館と連携した主体的な鑑賞教育のあり方の実践が発表された。子どもたちのイメージを深める工夫、学校近隣のパブリッ

クアートの活用、水墨画の表現指導等、創意工夫ある授業実践や研修等が紹介された。

第二分科会

書写（石川書写教育研究会）

基礎基本を大切に、既習を生かして書く力を養う授業において、教師の指導観を変えることで、児童の意識が変容するという実践であった。例えば、「土」がへんになると、とめが、はらいになると気づくことや補助線を引くと、左右のバランスが考えやすくなり、意欲的に授業に取り組み児童の姿が、見られた実践であった。



生活（県小学校生活科・総合的な学習研究協議会）

気づきの質を高める手立てとして、①意図的・計画的・組織的な単元計画で、児童の意欲を高めること。②多様な思考や表現活動の工夫を図り、五感を使って調べさせることで、コミュニケーション力の向上を図られた。評価の工夫として、①児童に、視覚的に達成感を持たせること。②ルーブリック評価をもと、児童の変容を価値づけすることが有効であった。

総合的な活動（白山市学校教育研究会音楽部会）

新見南吉作品を音楽劇にすることで、国語と音楽の教科横断的な題材として表現活動を育てた。舞台表現活動がもつ教育的価値を信じ、本物にふれさせた

いという教師の熱い思いがふれる実践であった。児童が長いスパンの中、楽しみ、自信をもって表現することで、自分の成長を感じることができた。

第三分科会

社会（県社会科教育研究会）

「長篠の合戦」の学習をするとき、武田騎馬隊の強さを理解させるために、児童とともに馬の模型を作ったり、騎馬隊が一斉に向かってくる様子をパソコンで見せたりすることによって、当時の騎馬隊の様子を実感させる工夫をしていた。児童の興味を引く手だてがいろいろ行われており、興味深かった。

保健（県養護教育研究会）

「健康問題に気づき、健康課題を見つけることができるような児童生徒を育成する」ために、個別保健指導の工夫をしていた。その実践は、①フローチャートによる指導②そのプロセスレコードによる記録化③個別事例検討の結果から、子どもの変容を見るところであった。その結果、児童が自分自身への健康の意識が高まったという成果がみられた。



情報（金沢市小学校教育研究会 情報部会）

五年社会の授業でタブレット端末を使ったCMづくりを行った。タブレットを使うことによる、撮影から編集までが一台でき、写真・動画など表現が多様で、どこでも簡単に使える

こと、そして、児童が満足できるきれいな作品ができることである。タブレットを班で一台だけ使うことによって協働学習のねらいを達成することにも役立っていた。

第四分科会

社会（県小学校社会科教育研究会）

「工業生産と工業地域（五年）」の単元で、触図筆ペンを中心教材として扱った実践が報告された。消費者の願いとそれに答えようとする開発者の並々ならぬ努力を知ること、子どもたちは社会を営む人々の努力や生き方について考えることができた。実際に、東京大田区の工場まで出向き、開発者の方に直接話を伺うなど、授業者の熱意が伝わる実践であった。



学校事務（県公立小中学校教育 事務研究会）

学校経営ビジョン実現と予算有効活用のための予算委員会の設置に取り組んでいる。また、クレド（信条）カードを活用し、意識の恒常化を図ってきた。県内全体で研究の推進ができたことや、認識や考え方の変容と新たな価値観への気づきが得られたことが成果として報告された。

英語（小松市教育会英語研究会）

「書く力」に焦点を当てた授業実践である。「クイズ作り」「感謝の手紙」など、学年のねらいに基づき、意欲を持って取り組めるよう工夫された活動が

計画的に行われている。英語を使いながら身につけていく過程を大切にしてきたため、学習に取り組み姿勢が前向きになってきている。小学校の外国語活動により話すことに抵抗はなくなってきたが、「読む・書く」の壁をどう超えていくかが課題である。

平成二十六年度役員一覧

会長	三益象一（金沢市高尾台）
副会長	川原 弘明（金沢市額小）
	出雲千映子（白山市明光小）
	松浦 博臣（金沢市明成小）
理事	新川 淑恵（能美・浜小）
	長谷川 肇（河北大根布小）
	松山 智明（羽咋・余喜小）
	新田 香輪（島・河井小）
	浅水 剛司（金沢市菊川町小）
	武田 秀一（金沢市大浦小）
	細川都司（金沢市安原小）
	小澤 雅人（金沢市粟崎小）
会計監査	百海 裕平（鹿島・鳥屋小）
	中村 秀治（金沢市小將町中）

編集後記

昨年の記念すべき第一回研究大会の成果を受け、第二回研究大会を盛会で終えることができました。

参加型形式の自主的な研究会の中で、交流し合い共に高まる意義ある会となりました。今年も当日の熱気あふれる記録をここに記すことができ、広報部一同、安堵の思いであります。第五号発行にあたり、原稿を執筆された先生方及び御協力頂いた皆様方に感謝申し上げます。

（広報部 浅水 剛司）